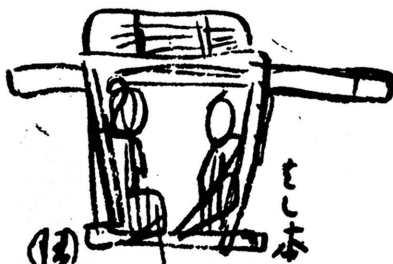


淨瑠璃正本解題

横山

正



美丈御前
幸壽丸 身替弓張月

西澤一風、田中千柳の合作。

「外題年鑑」によれば、享保十年五月六日より豊竹座に於て初演してゐる、この時竹本和泉太夫は竹本

座から豊竹座に轉じ、豊竹和泉太夫と改名して出演し、豊竹品太夫はこの時が初舞台であつたことが「今昔操年代記」

「外題年鑑」に見えてゐる。

本曲は謡曲「仲光」、上總少様正信の正本「公平法門諍」(寛文三年板)等の系統を引くものであるが、殊に同系統に屬する「忠臣身替物語」の影響を多く受けてゐる。

本曲の構成は源満仲の子美丈御前と、藤原仲光の子幸壽丸との身替物語に、源氏の名綴の由來を添へたものであつて、あまり好評を得なかつたのであらうか、初演以後再び上演されなかつたものゝやうである。

正本には七行八十四丁本と、十行五十四丁本とあり、十行本には菱屋治兵衛の單獨の奥書あるものと、菊屋七郎兵

衛、菱屋治兵衛の連名のものとの二種がある。

大阪府立圖書館の十行本には「享保十年乙巳五月六日大坂豊竹座において興行、文化十四年丁丑春表装をあらためて洒落齋文庫にをさむ 式亭三馬」との書入あり。又京都帝大國文學教室蔵の七行本には「享保十年五月六日初日、和泉太夫品太夫出座」との舊藏者の墨書がある。これらは共に「外題年鑑」によつて書かれたものかと思はれるが興味がある。

翻刻は未だされてゐない。

(梗概)

第一、序(大内の段)

一條院は僅か御七才で、西の宮左大臣高明野心を抱き、田原千晴がこれに力を合せてゐる。永延元年霜月下旬節會の折、高明は源満仲をその家來の無禮にかこつけ陥れようとするが意の如くならず、遂に千晴の娘唐糸と満仲の末子美丈御前との婚約を結び仲間に入れようと謀る。満仲當惑するが、右大臣藤原師尹が一先づその場を治める。

中（稻荷茶屋の段）

筑前三笠郡土山の寶珠文殊の唐作といふ刀鍛冶が田原千晴に招かれて都へ上る途中、伏見稻荷の茶屋で茶汲女に呼止められる。女は唐作が千晴にだまされてゐるとの狐のつげがあつたと語れば、唐作はそれを信用し、そして茶汲女と夫婦となる。

切（千晴館の段）

都の千晴の館では高明と千晴とが謀反の密談をしてゐる。千晴の娘唐糸は自分の部屋に來た四足の鳥によつて父達の運命を占つてゐる、千晴は高明と共に立出で鳥を殺し陰謀の血祭にする、召に應じて來た唐作に天子の劍と將軍の劍とを作することを命ずるが、唐作は高明等の陰謀を知つてをり、拒絶して歸る。

第二、口（御幸の段）

花山法皇は弘徽殿亡き後、その妹の三の君のところへ今日御幸になる、侍女達は高明の姉大政所が來てゐるのでお歸りになるやうおすゝめ申上げる時、一矢が飛來して法皇の御身体にふれる、人々驚き此處でしばらく御養生申上げることにする。

切（三の君館の段）

三の君の館では大政所等を迎へて賑つてゐるところへ侍女が法皇を御案内する、この時高明が來るので法皇を

奥へ御案内申上げる。姉の大政所は高明が矢を射たことを察し、烈しく叱るので高明は改心を装ふ。法皇は高明に忠義をつくすやうにとのお言葉と共に、道命法師をおつれになつて西國三十三所巡禮の御旅に出られる。

第三口（清水詣の段）

滿仲は美丈丸をつれて清水へ花見に招かれ轟坊に迎へられる、ちと達は左右にわかれ京の名所を説明する（洛陽名所屬）。やがて轟坊の案内で皆々寺中に入る。

中（清水寺の段）

酒もすみ賑はふ折から、高明の使者として室津權の頭が來て、千晴の娘唐糸と美丈丸との夫婦の盃を今日することを申込む。この時滿仲は美丈丸が禁制の花を折つたので首を斬ると、怒りつゝ出て來るので使者は驚いて歸る、仲光、保昌は美丈丸の助命を願ふが、滿仲が承諾しないので仲光の子幸壽丸を殺し、幸壽丸に扮した美丈丸にその首を持たせて行くこととする。

切（滿仲館の段）

幸壽丸の首を持つた美丈丸と仲光の妻とは、滿仲に代り實檢する御台所の前にすゝむ、御台所は幸壽丸の首と知り、人々の心を思ひやるが、美丈が先妻の子でなく自分の子であるため見逃がすわけに行かず、又滿仲が唐糸との結婚の難をのがれるために美丈を殺さうとしてゐる

事情を語る、美丈丸これを聞き千晴の館へ斬入らうとする時、満仲が歸宅し、美丈丸の髪を切つて人々の身替の苦心に報いる。

第四（法皇順禮道行）

花山法皇は道命法師を御供に三十三所巡禮の旅をおつゞけになり、那智山、紀三井寺、高野山とたどりたどりつて行かれる。

口（唐作内の段）

巡禮の花山法皇に御宿し奉つた鍛冶屋唐作の妻は、毎年の例により明々後日わが子唐松が大蛇の人身御供になることを語り、大蛇退治を懇願する、村の下役來て、唐作が唐松を殺させまいと代官に訴へ出たために妻に唐松を連れて直ぐ來いと知らせる、法皇は都の満仲に大蛇退治をお命じになる。

切（決斷所の段）

唐作は代官に大蛇退治を求めるが、庄屋彦六兵衛は唐松が熱病にかゝつたことを證據として人身御供にせよと迫る代官は輝郭勝の繼子立の法により、村中の八才の子供の中から一人を選ぶことにする。（繼子立かぞへ歌）。この結果又唐松と定まるので、唐作は唐松が妻の連子であるため殺し得ない氣持を語る、妻も自分が平井保昌の妹で、唐松は満仲との間に出來た子であり、寶珠文殊の唐作に名剣を

打たすために満仲から頼まれて唐作と夫婦になつた事情を語る、この時法皇おいでになり、大蛇退治を満仲にお命じになつたことをお話しになれば、唐作は二日間に二つの名剣を打つ決心をする。

第五、口（唐作細工場の段）

唐作夫婦は二日で刀を打つたが苦心のため忽ち白髪となる、満仲は仲光、保昌と共に來て刀成就を喜び、唐松を唐作の子として名を擧げよといふところへ、代官が高明、千晴を召捕つて來る、唐作は自分の刀で千晴の首を斬るが膝まで切つたので満仲それを膝丸と名づける。

切（能勢山の段）

仲光、保昌は大蛇に向ひ、大蛇は名剣の威にうたれ遂に保昌のためあざとを斬られ、ひげまでも斬られて滅亡する斯くて御代は治まる。

「大佛殿万代石礎」の解題は「日本文學大辭典」にある故省略する。

